

弥生時代後期の「周溝状遺構」～稲の屋外積みについて～

浜崎 悟司

はじめに

筆者は先に北陸の弥生時代後期頃の集落構成要素の一つとして「小環状溝」を提唱した〔参考文献1（以下同じ）〕。その後自分なりに検討し、各地の研究者と機会をとらえて議論する中で、当該遺構について九州等の一部地域に検出例の蓄積のある「周溝状遺構」の系譜で理解される可能性があることに気付いた。石川県内の発掘調査報告において同種の遺構についての言及が必要な場合も生じてきており、拙案に触れるものもでてきた〔2〕。光栄なことだが、筆者の同種遺構に対する認識は進化を続けており、実は先の提唱を発展的に解消したいところまでできてしまっている。ここで再び私見を紹介し、研究者各位の批判を広く仰ぎたい。本論の主張は大まかに言って次の3点である。

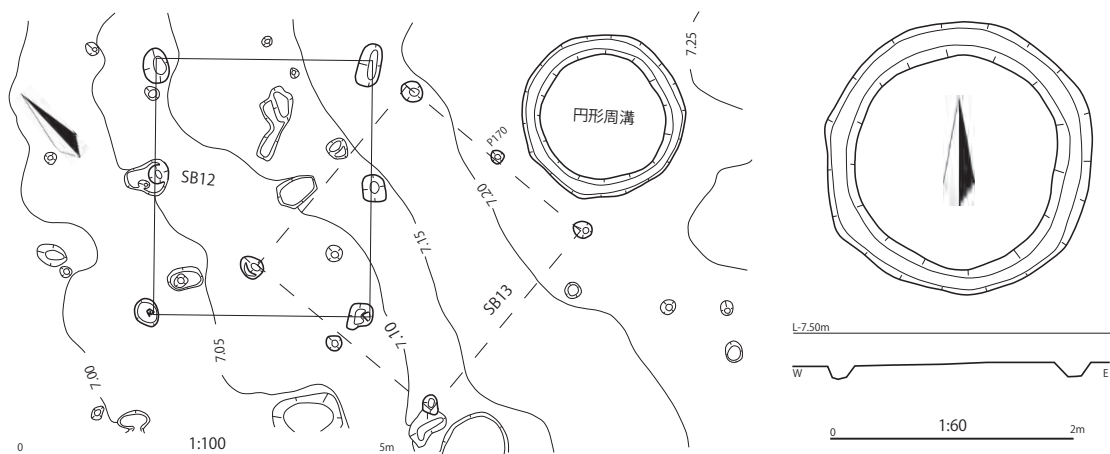
- ① 北陸の「小環状溝」を、九州等地域の「周溝状遺構」の系譜に位置付ける。
- ② 「周溝状遺構」を季節的な平地式倉庫（稲積）と考え、種子稲の越冬施設とみなす。
- ③ 弥生時代における「稲の産屋」の存在を認める。

1. 北陸の「小環状溝」例

「小環状溝」は「周溝遺構」とされる形式の遺構である。富山県域で検出例の多い、弥生時代後期を中心とする集落域の遺構で、「小屋」として集落構成の一部を担うものと理解されている〔3〕。一方福井県では管見に上る資料がない。筆者は先に「周溝遺構」とされる遺構のうち、平地式倉庫と考えうる諸例について「小環状溝」と呼ぶことを提唱した。

石川県における「小環状溝」は、これまでに知り得たもので20例を超える⁽¹⁾。

金沢市梅田B遺跡〔4〕下層（弥生後期後半）例（第1図・『報告書』図版17の「円形周溝」）が石川県における好例である。遺構に対する認識が不十分な頃の調査資料のため周溝埋土の記録は無い。写真などによれば包含層に近い質の黒色土主体であったと思われる。近接して検出された掘立柱建物が2棟ある。一部分が重複する2×1間の正方形プランの掘立柱建物（SB13）と高床倉庫（高倉）（SB12）であり、この2棟の同時存在は想定できない。年代の先後を決定しえないが、掘立柱建物はそれぞれの一辺の延長が「小環状溝」の円形台部の接線となる位置にある。SB13の方位が、逆断層の活動により廃絶したと考えられる溝SD112の走向と良く揃っていることを考えれば、SB13が後出であったとも考えられる。同遺跡下層の調査範囲では建物の建替えは最多でも1回にとどまっていることから、

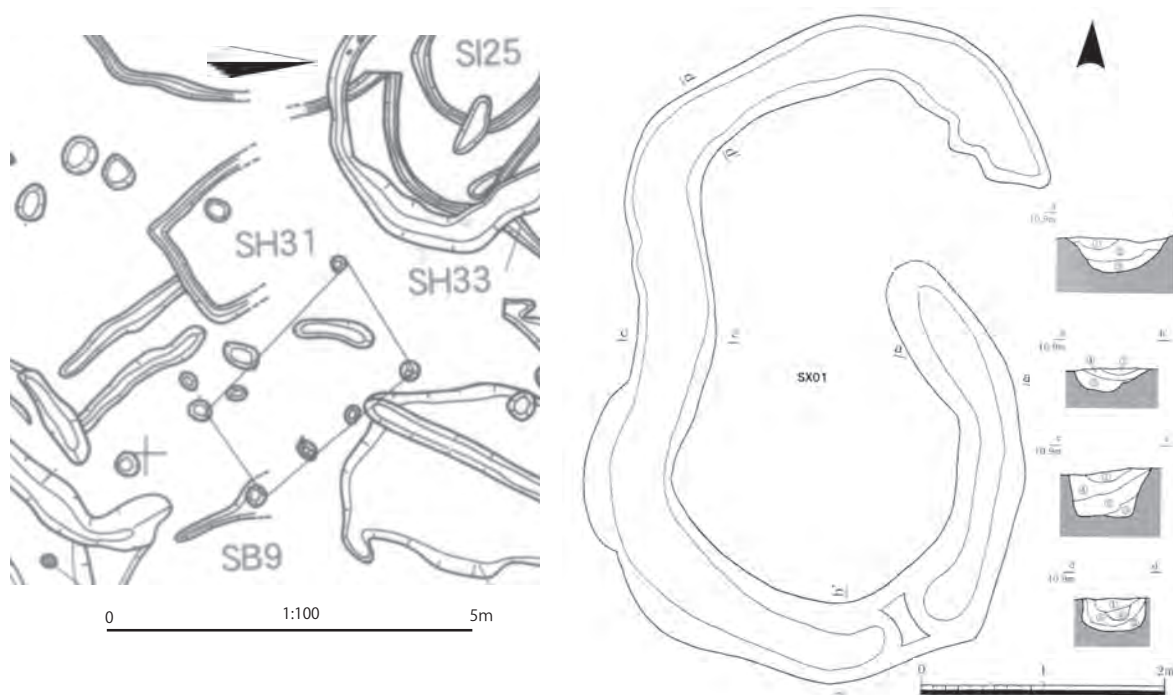


第1図 金沢市梅田B遺跡の「小環状溝」(S=1/100、1/60)

「小環状溝」は何れか一方、あるいは両方の建物と併存した可能性が高い。

石川県内の「小環状溝」の高倉近接事例には他に、小松市平面梯川遺跡 [5]、野々市市高橋セボネ遺跡 [6]、羽咋市吉崎・次場遺跡 [7] などがある。高倉はいずれも掘立倉である。また、白山市横江古屋敷遺跡 [8] では主屋の出入り口前方に、「小環状溝」が位置している⁽²⁾。石川県の「小環状溝」は弥生後期後半～終末期を中心につくられたとみられる。

富山県では上市町江上 A 遺跡や高岡市下老子笹川遺跡などに多数検出例がある「周溝遺構」の中に「小環状溝」が含まれるとみている（第 2 図）⁽³⁾。江上 A 遺跡 [9] では炭化米の大量出土、高倉への近接と主屋前面への配置が認められる。下老子笹川遺跡 [10] では B6 区 SH31 が倉庫 SB09 との近接例とみなせる。SH31 埋土からは、少量ではあるが炭化穎が他種の種実を交えずに検出されている。試掘溝により一部を失っているが、同遺跡での標準的な「周溝遺構」としてプランを復元すれば、周溝の北西辺がすぐ隣の SB09 の短辺とほぼ揃う位置にあることになる。同遺跡では種実同定が広汎に実施されており、SH31 の他にも多くの周溝遺構から炭化穎が検出されている。SH31 のように試料中の包含は少量にとどまる場合も多いが、B5 区 SH15 では種実 300 余点中 1 点の例外を除き全て炭化穎である。高岡市石塚遺跡文苑堂地区の報告 [11] で周溝状遺構と呼ばれる SX01 は弥生時代中期後半～末に遡る例である。埋土各層には、「炭化物」を含む。だるま型のプランのもので、これを建築構造に復元するのは困難であろう⁽⁴⁾。



第 2 図 富山県の「小環状溝」（左：下老子笹川遺跡 S=1/100 右：石塚遺跡 S=1/60）

なお「小環状溝」には福井県の資料で管見に上る例がない。弥生後期における北陸の「小環状溝」の分布は、石川を間に挟んで東の富山、西の福井の間で濃淡が鮮やかに分かれているのが現状である。分布の濃淡の意味についてはこの遺構の機能推定を行なった後に考えてみる。

2. 九州等の「周溝状遺構」

「周溝状遺構」については片岡宏二氏が先駆的に取組まれ、『周溝状遺構』の検討（以下、「検討」とする）など [12] を発表されている。1990 年代前半の発掘調査量の増加により同遺構の検出数が激増した結果、「検討」は追録が追いつかなくなり、旧北野町（現久留米市）良積遺跡の紹介を最後

に、現在に至る中断期間にはいった。『小郡市史』中の片岡氏の解説にもより、「周溝状遺構」の要点を筆者なりに抽出すると、九州等の一部地域（筑紫平野・阿蘇～大分県西部・鹿児島県北東部～宮崎県・松山平野など）の集落遺跡に一般的に検出される環状の溝遺構、年代は弥生時代中期初頭（小郡市三沢京江ヶ浦遺跡例）から同終末期頃、大型住居あるいは高床倉庫に近接して検出される場合がある、遺物を伴うことは少ないが大量に発見されたものもある、広場に設けられる場合などから祭祀関連の遺構であろう、などとなる⁽⁵⁾。

「原の辻 on Web」によれば、周溝状遺構は2009年頃の時点で全国に340件以上の検出例があるという。「検討」で指摘された諸地域に加えて、新たに壱岐原の辻遺跡、豊前下唐原遺跡群などでも検出されている。しかし九州島内において遺構の分布に濃淡があることは変わっていない。特に「弥生文化の玄関口」と呼ばれる玄界灘沿岸地域で発見されない状況は傍目にも特異である。なお1999年2月に全国報道された福岡市雀居遺跡の周溝遺構（家畜小屋）は、その後刊行された報告書の付冊[13]中に、「周溝状遺構」とは異種の遺構である旨を丁寧に記した短報が採録されている。

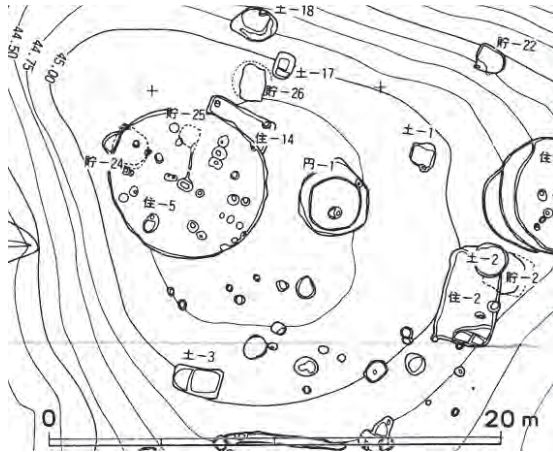
「周溝状遺構」について概説などが取り上げることは多くないように見受けるが、分布域ではごく普通に検出される遺構である。しかし、遺構単品に関して言及されることは稀である⁽⁶⁾。

第3図には「周溝状遺構」における高倉近接例を挙げた。筆者は報告書などで見るばかりで、「周溝状遺構」を実際に現地で見たことはない。個々の「周溝状遺構」について記すべき事も思い浮かばないが、図示例中の都城市平田遺跡A地点[14]は注目される。平田遺跡A地点では複数の周溝埋土から多量の炭化米が検出され、またその周溝埋土には稲葉由来のプラント・オパールが含まれていたという⁽⁷⁾。粳に加えて、稲葉由来のプラント・オパールという点は押さえておきたい。分析結果を素直に受け止めれば、周溝の埋土に稲束が入り込んでいたものと解される。宮崎県ではこの調査が契機となり、種実同定やプラント・オパール分析などが各種遺構埋土について積極的に実施されるようになった。関係の報告書から「周溝状遺構」と、比較の意味で同じ遺跡での竪穴建物等での分析結果を抜粋してみた（第1表）⁽⁸⁾。供試された「周溝状遺構」の埋土はほぼ例外なく、炭化穎や稲葉由来のプラント・オパールを含むという結果が得られている。

「周溝状遺構」には密集して検出される例（第4図）もある。複数設置の必要が間々生じる施設で、同じ地点に築き続けるべき性質の施設であると推定される。周溝に囲まれる範囲は正方形もしくは正円形に近いものが一般的であるが、長方形や長円形の場合も珍しくはない（第5図）。長方形や長円形の場合、長短の軸長比が2:1に近いものが多いように見受ける。長辺弧の中央が括れただるま型プランのものがあることからすれば、台部は正方形もしくは正円形を基本形とし、そうした基本形を連ねることがこの施設の増設乃至複数設置の方法であったと考えられる。

こうした増設方法をとる弥生時代の遺構について、一般には「小屋」とは呼び難いであろう。その一方、佐賀県吉野ヶ里遺跡[15]吉野ヶ里地区V区SX0992（第6図）は周溝内に規矩的ではっきりした壁体痕跡が認められる例である。片岡氏はこの遺構について「検討」で「周溝状遺構」として紹介し、「何かを立てかけた」痕跡とする。これは傍目には十分に「建物」にみえるもので、「壁立式平地住居」の具体例として概説書に挙げられても⁽⁹⁾違和感の無い資料に思われる。しかし片岡氏は長崎県壱岐市原の辻遺跡の報告書に寄せて、福岡県朝倉市平塚川添遺跡[16]例も併せ周溝状遺構について再論[17]する中で、同遺構について、「板を立てて内部を遮断したような痕跡」とし周溝状遺構に含める考えを変えていない。

同論考の中には「弥生時代のクニの中心的な集落における周溝状遺構の意味は、一般的な集落における意味とは違ったものであるかもしれない」、「周溝状遺構の持つ最大の問題点は遺構の性格である」



小郡市三沢京江ヶ浦



福岡県大刀洗町野間本郷



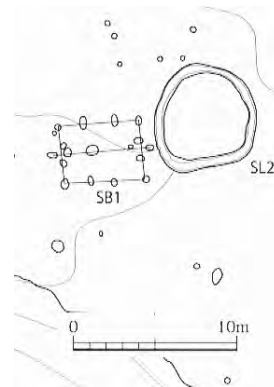
福岡県夜須町（現筑前町）当町



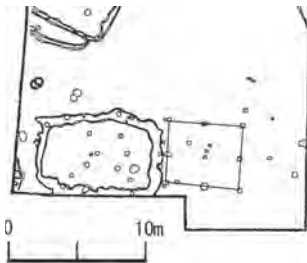
福岡県夜須町（現筑前町）中原



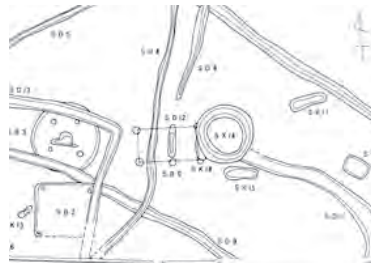
佐賀市村徳永 20 区



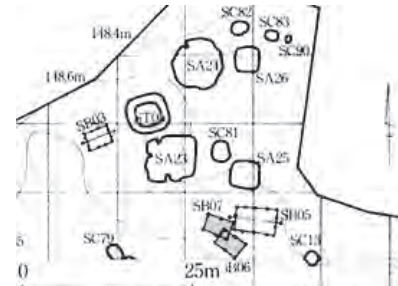
都城市平田 D 地点



松山市福音小学校構内

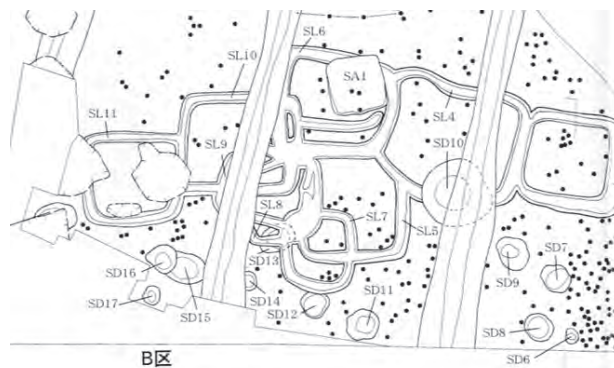


松山市文京 10 次



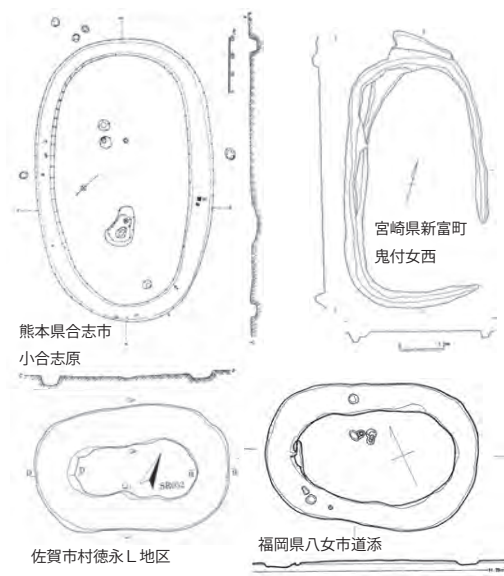
都城市平田 A 地点

第 3 図 「周溝状遺構」の高倉等近接例

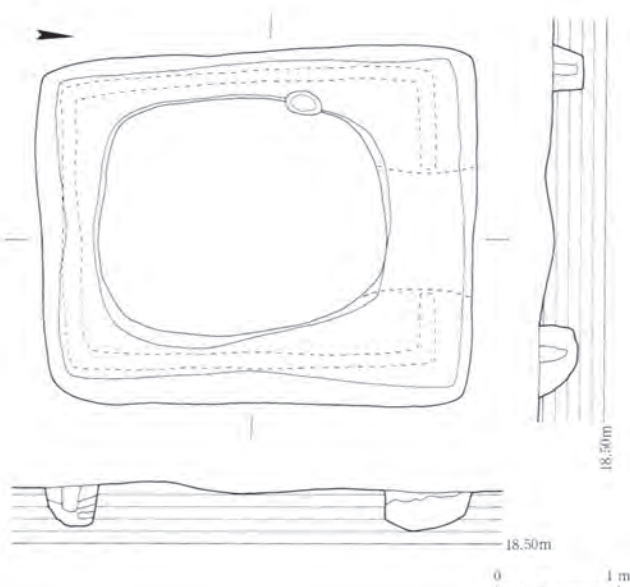


図左から、小郡市上岩田、久留米市彼坪、宮崎市桜町

第 4 図 「周溝状遺構」の連接例・密集例 (S=1/400)



第5図 長形の「周溝状遺構」(S=1/200)



第6図 佐賀県吉野ヶ里遺跡の「周溝状遺構」(S=1/60)

といった非常に興味深い記述がある。前者は周溝状遺構における格付けの問題、後者は祭祀の具体的内容の究明のことを、それぞれ指すものと理解される。こうした点について北陸の類似遺構を加えて考えてみるとどうなるか、以下に述べてみたい。

3. 「周溝状遺構」と「小環状溝」の比較

考古資料の実情として「小環状溝」は北陸の「周溝遺構」にほぼ包摂される。そして「周溝遺構」は「小屋」として、北陸の「周溝をもつ建物」形式群の中に位置付けられている [18]。

北陸における「周溝をもつ建物」と九州等の「周溝状遺構」はともに1980年代後半から1990年代半ば頃に、それぞれ地域を基点として認識が深まった遺構である。しかし両者の研究史には交渉がなかったといえよう⁽¹⁰⁾。片岡氏は北陸の例として1遺跡の例を認識しておられたそうであるが「検討」で触れるに至らなかった。また岡本淳一郎氏は「周溝遺構」として九州等や大阪の例をも挙げている [3] が、片岡氏の「検討」を参照したものではなく、独自の資料検索によっていたことは列挙された資料から明らかである。

九州等では片岡氏に続き積極的に研究を先導する論者が現れず、また北陸では「周溝をもつ建物」形式群としての認識の一般化・広域化 [19] に伴い、ともに遺構としての周知度に反比例するかのよう、在地での研究はやや停滞期もしくは熟成期にはいった感がある。こうした研究史の中で、「周溝状遺構」と「小環状溝」とは時に接近する機会がありながらも、図面を突き合せて比較検討されるような機会がこれまでにはなかったように思われる⁽¹¹⁾。

私見では、若干の明らかな別種遺構を除外すれば、「周溝状遺構」と「小環状溝」の規模や形状の近似は明らかなことのように思われる。加えて両者は年代がほぼ重なる。ともに単純な形状の遺構であるから「他人の空似」による誤認が懸念されるかもしれないが、北陸の「小環状溝」として現在最古級と目される高岡市石塚遺跡のだるま型プランの「周溝状遺構」については、系譜を東方ではなく西方に求める以外にないものであろう。

「周溝状遺構」と「小環状溝」、ともに高倉への近接例、大型竪穴への付随例が認められる。加えて、稲が至近に集積されていたことを窺わせる資料があることも共通する。

以上の点から、「小環状溝」は「周溝状遺構」の形式組列上に位置付けうると筆者は考えるようになった。

た。「小環状溝」の後出性、「周溝状遺構」のバリエーションの豊富さを思えば、九州等地域から北陸への伝播を考えることになるだろう。同種の研究対象について異称があるのは良くないので、筆者としては「小環状溝」を撤回し、先行して提唱されていた「周溝状遺構」と呼ぶことにしたい⁽¹²⁾。「小環状溝」の機能の問題は「周溝状遺構」のそれとして考察することになる。

4. 「周溝状遺構」の機能

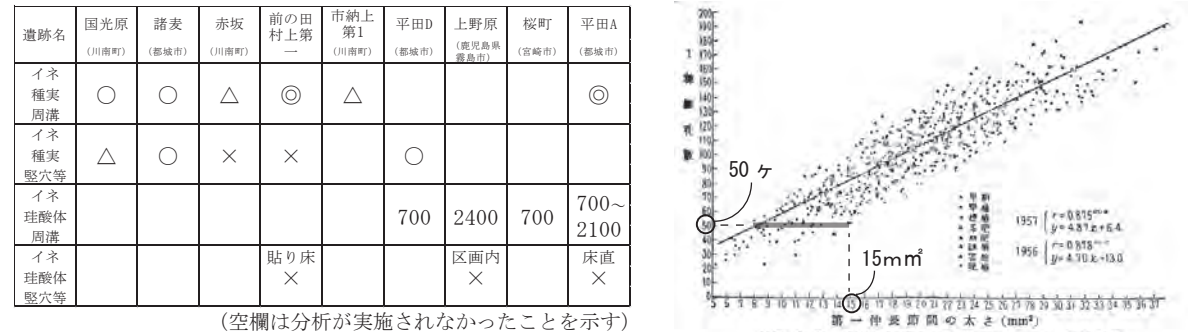
「周溝状遺構」の機能については、片岡氏が述べたように「祭祀関連施設」と理解されているのが現状であろう。ただ、複数の論者が既に述べるように、「祭祀」の内実についての具体的な言及がないため研究が進まないのではなかろうか。筆者の資料検索では、稲との関係が浮かび上がったように思える。部外者の生硬な戯言に思われるかもしれないが、以下考えるところを述べてみたい。

まず周溝の掘削土を、墓や建物の場合に倣って、内側に積んだと考えれば、それは「土壇」を呈したであろう。溝が接続する場合なども含め、周溝内側は水気が無い方が好ましいとされる場所だったのであろう。また、宮崎県等諸遺跡での分析結果に表われたような、稲葉を伴った粃が伴う状況を素直に解すれば、「周溝状遺構」の近傍、おそらく周溝に囲まれた内側には稲があった、より厳密な言い方をすれば、稲があった期間があった、と考えることになる。稲が置かれる土壇とは何であろうか。筆者のささやかな人生経験から直感されるところでしかないのが恐縮だが、これは稲積と考えられる。筆者が知っている稲積は稲刈り後の乾いた水田に造るものであるが、『一遍聖絵』の冬の常陸国の段に稲積が宅地に築かれた様子が描かれていることからすれば、過去における状況として、集落内に稲積がつくられること自体は有り得ない想定ではないだろう⁽¹³⁾。

「周溝状遺構」が高床倉庫と併置される、あるいは同種遺構が接続するといった検出状況が決して特異例ではないこともこの想定を助けるであろう。規模に大小がありながらも、基本形が想定できることも同様である。稲積とは一種の平地式倉庫（「平倉」）といえるものであろう⁽¹⁴⁾。これらは「周溝状遺構」の性格に関するこれまでの言及と矛盾するものではない。弥生時代において倉庫は祭祀の場・対象であったであろうから、拙案はその祭祀の内実を具体化する一案たりうと思う。以下、筆者が気にかかっている上述案の問題点について補説を試みたい。

弥生時代における収穫稲の保管施設として、考古学では一般に高床倉庫を充てている。ほかに「袋状竪穴」（北陸の「大型土坑」）などの地下式穴倉を考える説[20][21]があり首肯できるが、穴倉は「周溝状遺構」とは、九州においては盛行期が、北陸においては立地等が異なるため、機能の重複が考えられるとしても本稿では大きな問題とはならない。しかし「周溝状遺構」を平倉とみるとすると、高倉との併存は分布域の集落遺跡には随所にみられる事象であり、一考を要する。

一般に弥生時代の高倉には穂摘みされた稲穀がバラ積みされ、然るべき時に脱穀～供食されたものと考えられる。一方稲積と考える「周溝状遺構」では稲体として貯蔵されるため、穂に加えて稈以下



第 1 表 「周溝状遺構」におけるイネ関係微細資料の検出状況 参考 稲茎基部の太さと粃数の相関（松島 1971 に加筆）

部分の場所をとることになる。同じ量の粃を収納するのに、ざっとみて穂摘み稲の5倍あるいはそれ以上の広さの空間が必要であろう。従って、「後で穂首を取り出して高倉に収めるに先立ち一時的に集積しておくための場所」といった類の「高倉貯蔵のサイクルを補完する施設」とする理解は成り立ち難く、高倉とは異なった貯蔵目的を考えたほうが良い。遺構図の上で2種の倉庫の近接は必定のことではないから、これについては管理者が共通した等の事情の反映とも理解できる。さて、稲積に収まった稲は今にもいう「懸税(かけぢから)」の形状を呈したことになる。稲体は供物であり、やがて「お下がり」として翌年の種子と万能材料である藁になったのであろうが、両者を取分ける「種下し」時点での品種判別と良粃の選択は「稲体」によって大いに助けられたに違いない⁽¹⁵⁾。場所を取る上に労力のかかる稲積をわざわざ行っただとしてその意味を考えると、筆者などがこれまで殆ど想いを馳せたことのない、弥生人たちの「種子に対する配慮」が浮彫りになる。

稲作の規模を拡大するにあたってはより多量もしくは多品種の種子を必要としたであろうから、「周溝状遺構」が接続もしくは群集状態で検出される場合の意味も理解し易い。稲積が行なわれた場所は播種後は収穫までの間空き地になったと考えられるから、「周溝状遺構」の大多数に共通する遺物が乏しい状況を説明しうる。稲積は稲を干す機能をもつので積まれた稲束はよく乾燥し、「種下し」の作業時には脱落した穂粃と茎葉が、覆いや下敷きに用いられた稲藁とともに周溝内にも多少なりとも散布することになったであろう。希少例だが、炭化穎が大量に検出された「周溝状遺構」は、翌年の播種が行なわれなかったことを示す可能性がある。ともあれ「周溝状遺構」におけるイネ遺体の検出状況は、これを営料種子保管のための稲積と考えることによって、極めて整合的に理解できるものであろう。

ところで、稲積の技術上の前提として考古学的な理解によれば、稲茎を長く保ったまま収穫するためには鉄製工具による根刈りが不可欠な作業であった、と考えられているのかもしれない[22]。しかし弥生時代の稲について現在行なわれている収穫量推定[23]から草姿を思い描くと、岡山市百間川原尾島遺跡[24] 弥生後期水田の「稲株痕跡」の栽植密度400株/坪から逆算される限り、現在我々が目にする稲よりも思い切り弱勢なものしか想定しえない[25]⁽¹⁶⁾。安藤広道氏が「弥生時代の数値としてあまりに高すぎる」とした「1株2穂、1穂あたり粃50粒」の稲穂ですら、松島省三『稲作の理論と実際』1971年第35図が示す散布図(参考図)によって稈基部の太さに換算すると、最も太くみても15mm×2本にすぎない。15mmといえば長径5mm、短径3mmである。このような弱勢穂を茎ごと収穫するために、鉄製工具が必要、というのは贅沢がすぎるのではないか。2本まとめて「草むしり」の要領で、徒手での拔取りや石鍬などによる「根コジ」が充分可能であろう⁽¹⁷⁾。また、翌作の種子用であれば、生産物の全部について拔取りする必要は無い。生産規模を維持するためだけならば、収穫全体に対して1/[1種子あたり登熟粃数]で良い筈である。弥生時代の種粃1粒が収穫時に何粒に増えたか想像の域を出ないが、上記の安藤氏の記述を参考に50粒と仮定すれば⁽¹⁸⁾、必要な種子量は全収穫量の1/50である。拡大再生産を想定し、芽だしと苗立ちにかかる安全率を高く見積もり多めに種子を確保するとしても、全収穫量の1/10程度についての作業で済んだであろう訳である⁽¹⁹⁾。穂摘みに比べれば「根コジ」は稲体の集落への運搬も含め、確かに労力のかかる作業ではあったであろうが、それは何よりも翌年の再生産のためである。弥生人たちは厭うことなく、いやむしろそれどころか、感謝の想いを漲らせて「拔茎」に取り掛かったことであろう。

以上から、弥生時代における稲積の前提として「鉄製工具による全面的根刈り」に拘る必要は特に無いと言わざるを得ない。件の言説は現代の慣行農法を前提にしており、弥生時代に遡及させることには弊害が伴う⁽²⁰⁾。考古学的知見に基づく稲草姿の推定と収穫方法の検討から、弥生時代集落に

稲積が存在し得ない訳ではないといえる。一方「周溝状遺構」自体は稲積と考えるものである。よって筆者は②を唱える。収穫後、集落に稗あるいは根付きの稲穂が搬入されるという、従来日本考古学ではなされてこなかった想定をすることになるが、これは前近代の農民であれば誰もがもっていたはずの、「種子に対する心遣い」の表われとみたい。「周溝状遺構」は稲種をまつり保管する施設、つまり初穂儀礼に関連した遺構と考えることになる。以下、北陸の関連遺構について少々論を補い、そこから地域を広げ、古墳時代への見通しを述べる。

北陸における「周溝状遺構」の分布では、福井県における僅少性が際立っている。しかし弥生時代後期の福井県で初穂儀礼が行なわれていなかった訳ではなかろう。また全く別種の初穂儀礼が行なわれていたとも考え難い。極めて近い初穂儀礼が行なわれていたことを前提に論を進めると、福井県における弥生時代後期の高倉の多くが規矩的プランの布掘倉であることと、石川県並びに富山県での「小環状溝」併置例における高倉のすべてが掘立倉であることを想起すれば、布掘倉では倉室下に種子用の稲積あるいは近似の「種籾囲い」を行なったことを想定し得る。なお、布掘倉を特徴付ける布掘溝についてはいくつかの掘削パターンが知られている [26]。布掘溝が極端に浅いといった場合なども含め掘削「パターン」が決して定型的とはいえないことを想えば、布掘溝を持たない高倉（掘立倉）の倉室下においても稲積等が行なわれ得たことに考えが及ぶ。つまり弥生時代の高倉は、一般に考えられている稲穀の倉室における貯蔵機能に加え、種子保管という季節的平倉の機能を倉下に付随的に兼備したことが考えられる⁽²¹⁾。倉室下には当然ながら天井があるため、土壇を築くことは著しく不合理である。しかし高倉は一般に集落内の高燥な地点に設けられるため、倉室下に土壇をつくらずとも排湿的な環境は実現されていたとも考えられる。ただし北陸では稲積シーズンに積雪があるため、倉室下を囲う「雪除け」が必要であったのかもしれない。実効の点では囲わない稲積のみで十分な気もするが、弥生稲は弱勢と想定された。生育不良の年には穂籾を囲う稗部の幅が薄いことになり、小さな種子の守りは一層心もとなく思われたことでもあろう。倉下を囲うことについては、こうした北陸弥生人たちの種子を大切に育もうとする気持ちの表われとすれば得心がゆく。ともあれ、布掘倉と「小環状溝」という北陸の弥生時代後期に特徴的な2つの形式の遺構の相互補完的偏在については、両者に季節的平地式倉庫の機能を想定した上で、「弥生時代の当地の種子保管には「囲い」が必要と観念されていた場合がある」との仮定を挿み込めば、至極合理的に理解することができる⁽²²⁾。

弥生時代後期の布掘倉は山陰地域にも展開している。掘立倉の展開は言うまでもなくより広汎である。弥生時代にあつては、共通の初穂儀礼を想定する限りにおいて、高床倉庫さえあれば「周溝状遺構」の存否にかかわらず、稲積を想定することは決して不当なことではない。初期の稲作において、初穂儀礼（再生産のための営料種子確保）が余剰（営料種子を除いた生産物）の貯蔵に優先すると考えられていたとすれば、高倉よりも稲積の方にウェイトをおいた時期、地域、集落があつたとしても別段不思議ではない。

一般的に言って遺構の不在（不在にみえること）が関係慣習の不在を示す訳ではない。かといって「周溝状遺構」の不存在が異なった初穂儀礼の存在を即、示す訳でもない。ただしこうした弥生時代についての状況説明と、古墳時代に「周溝状遺構」がそれまでの分布地域においても集落遺跡から消失するという考古学的知見とは、同じ遺構の不在について述べるにもかかわらず、意味を区別する必要がある。なぜならば、「周溝状遺構」が弥生のムラヤクニの存続を保障する種子倉庫であつたとする仮説が正しいとするならば、片岡氏が提起する「格付け」の問題も含め、それは初期国家による支配システムの構築に際してかなり優先順位の高い「構造改革の槍玉」でもあつたと考えられるからである。

おわりに

以上から、筆者は稲積を伴った晩秋～翌春の当地北陸における弥生農村の姿を想い描くことになる。春先のムラにも芳しい稲藁の匂いがたちこめたのではないだろうか。慣れない書き方をしてきたが、「稲積」とは筆者にとって昔懐かしい、当地でいう「ニオ」のことである。

「ニオ」といえば日本民俗学でいう「稲の産屋」[27]のことである。文献史学は文字記録のみからでは遡及し難い古い時代の枠組み構築において、「稲の産屋」に負っているところが実は相当に大きいとみられる。「稲の産屋」に初穂儀礼や「新嘗」の原型を見出す古代史研究者は少なからずおり、また律令期田租について、「初穂儀礼に起源をも」つと本文記述する高校日本史教科書[28]も登場した。

一方、日本考古学で「稲の産屋」が顧みられることは、地域・時代を限らず、殆どない。播種と収穫、そしてそれらにかかる祭りが各地で毎年举行されてきたとは考古学とて考える、にもかかわらず、である。弥生時代に「稲の産屋」の存在を認めない理由が、「稲積するためには鉄製工具による根刈り作業が必須であるから」なのだとしたら、余りに自縄自縛な学だと思う。本稿は、弥生時代には「稲の産屋」に充てるべき遺構が見当たらない／「周溝状遺構」が関連する祭祀の内実は何か、という研究者に対して、「周溝状遺構」／「稲の産屋」がそれぞれ該当するのではないかと提起する⁽²³⁾。日本考古学の現状では古墳時代以降についても、稲積に充てる遺構についてやはり聞こえるものがない⁽²⁴⁾。別の機能が考えられる場合はさておくとしても、上述の事情や所謂「柳田批判」が考古学研究者の耳目を塞いでいるようなことがあるとしたら、残念でもったいないことだと思う⁽²⁵⁾。

「周溝状遺構」の発掘調査経験の点でも、イネや稲作に関する知識と経験という点でも、筆者はこのような議論の提起人として決して相応しい者ではない。何か重大な失考に陥っている危険性は九州等地方や富山県の調査担当者よりも大きいし、「稲株痕跡」や弥生時代の稲を実際に観察したことがある訳でも勿論ない。さらに言ってしまうと、仮に首尾よく②が認められることがあったとしても、その先の研究の展開には浅学な筆者自身はついていけないだろう。つまりこうした臆説を公表することは筆者にとってみればハイリスク＆ノーリターン以外の何物でもない。しかし、昨今の国民生活と稲作との乖離を鑑みれば、今後も考古学研究者は誰も「稲の産屋」について一顧たりともしないままであろう⁽²⁶⁾。所詮近代稲作の一工程としてでしかないが、ニオ積を実際に行った日本人最終世代の一人として、筆者は自身に及ぶかもしれない些細なリスクを気にするよりも、稲作慣行に対する世間と研究者全体の関心の喪失を憂慮する。本稿が一人でも多くの研究者に、弥生時代あるいは他の時代の性格不明遺構とされるものの中に「稲の産屋」が本当に含まれていないのか、考えてみる契機になって欲しいと願っている。

筆禍が及ぶことを憚るため御芳名は控えさせていただきますが、御教示いただいた方々並びに議論していただいた方々には感謝しております。

註

- (1) 文献1掲載分に加え、加賀市松山D遺跡、野々市市二日市イシバチ遺跡、羽咋市粟生シモデ遺跡などに知られる。
- (2) 遺構図については文献1に掲載した。
- (3) 「周溝遺構」は小屋様の簡易な建物と考えられているが、一部については別の見方が可能と考える。
- (4) 九州等の「周溝状遺構」としては、珍しいプランではない(本稿第5図)。なお、SX01について文献11の記載によれば周溝が途切れるか否かは不明であるが、本稿の立場から「周溝の途切れ」に関して一般的なこととして述

べれば、途切れは註 24 で言及する遺構に付随するような「台部へ立ち入るための斜路」であることも考えられるため、そのみでは「小環状溝」である可能性を否定する材料とはならない。

- (5) 「検討」で最後に紹介され片岡氏が解析に期待を込めた、良積遺跡の報告（北野町教育委員会『良積遺跡Ⅲ』1999 年）では「周溝状遺構」について「周溝墓ともがり屋」説が採られたが、大勢とはなっていない。
- (6) 上田正昭「神体山と磐座の信仰」（上田他編『三輪山の神々』2003 年）に松山市文京遺跡の「周溝状遺構」についての言及があり（氏は「祭壇のみの形は古いタイプ」（の社）と述べた）、大家の見解として貴重。『「検討」以降、「周溝状遺構」の研究が進んでいないのは遺物がほとんど出土しないため（その分取組む必然性が乏しくなるから）だろう」と私談の中で教示くださった北部九州在住の研究者もいる。
- (7) 炭化米は 10cm 立方の土塊に 700 粒以上が包含されていた試料もあった。当時の稲にすると、5 株以上分に相当する量であり、単なる「埋土への混入」で済むとは思えない。それなりの説明が必要であろう。
- (8) 宮崎県埋蔵文化財センターなど各報告書による。
- (9) 宮本長二郎「弥生時代の建築」（奈文研編『日本の考古学』上巻 2005 年）。ただし本文中に遺跡名を挙げるのみで図示や遺構名記載がないため不確実。
- (10) 1990 年代前半において片岡氏の「検討」を入手していた数少ない県内研究者の方からは、「小環状溝」（当時は特に名称もなかったが）と「周溝状遺構」との類似を指摘する意見があったことは記憶しておきたい。言い訳めくが、「周溝状遺構」が北陸の集落構成上の主屋とは異形式であろうことが余りにも明白であった点が、これまでの筆者の「北陸における「周溝状遺構」」の軽視に繋がった感がある。
- (11) 文献 1 の元になった研究会報告後の討論の中で、山崎頼人氏（小郡市教委）が、「小環状溝」と氏地元の「周溝状遺構」との類似に驚いた、旨のコメントをされた。筆者は耳が悪く、一寸したどよめきの中その場では誰の発言なのか実はわからなかったが、氏のコメントに筆者は今もって勇気を得ていると思う。
- (12) ただし、拙論の検証のためや結論の認否を留保する上で有効であれば「小環状溝」の呼称が使われる場合があっても良いと思う。また拙論には、北陸などにおける「小屋」としての「周溝遺構」やその類似遺構の存在を否定する意図は全く無い。「小環状溝」と呼ぶことができそうな資料についてそう捉えたいのみである。
- (13) 稲積を知らない方には、「ニオ」「墓塚」などの関係語彙での Web 検索を勧める。『一遍聖絵』は巻 5 第 3 段に 5 基の稲積を描く。中央奥の空閑地にみえる「周溝」は稲積の基底であろう。考古資料の水田域には寺澤薫氏が注目する「島状高まり」（『弥生時代の年代と交流』69 頁）の中に稲積を想定してみたいものもある。
- (14) 建築史家の中には後掲「稲の産屋」の立場から稲積を建築としてとりあげた方がいる。江上 A 遺跡報告書の総括編は当該遺構について「溝で区画しただけの土間の倉庫」と記すが、「柱穴を必要としない上屋をもった倉庫」とも表現している。後者について「上屋をもたない倉庫」と素直に読み間違えれば拙論の立場になる。
- (15) 松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」（奈文研刊行会編『文化財論叢』1983 年）には穀と穎の関係について述べた部分がある。同様の理屈で穂首のみよりは稲全体の方が品種判別を容易にすると考えられる。
- (16) 私はこの「稲株痕跡」について（登熟前の）流失等により株元が拡大したものとする（浜崎「稲に親しむ」『石川考古』第 319 号 2014 年）。密植であることを理由に、検出された稲株の密度を未だに「例外的」とする向きがあるとすれば承服できない。生態学者吉良竜夫が農学者の試験結果をもとに描いた密度—収量曲線では、400 個体／坪付近以上で「最終収量一定の法則」が実現している（『吉良竜夫著作集』第 5 巻 307 頁）。百間川水田の栽植密度に関しては、自分達の稲と水田から最も望ましい収穫を得るために彼地の弥生人たちが知っていた必要最少種子量の反映、と理解される。発見から 40 年近く経過しようとする現在なお同遺跡の「稲株痕跡」を凌駕する資料はない。「例外的」とは栽植密度自体についてのことでなく、それが判明するという稀有な遺存状況を称える形容、と受け取り、常に考究の原点近くに据えるべき資料だと思う。
- (17) 前註拙稿に記した私の拔茎株は 1 個体を移植したもので穂数は 8、稔実数数は 487 であった。稿中私は、穂摘具

の存在が別方法の存在を否定することにはならないと主張した。なお乙益重隆は関東での石包丁出土の僅少性を訝って「一体関東地方における穀類の穂摘み作業はいかにして行われたのであろうか。まさか両手でむしったわけでもあるまい。」と記している(『考古学ジャーナル』260号)。蛇足とも取られかねない二言目の真意は不明だが、経歴から見れば氏の脳裏に「両手でむしる」に近い方法が幾らかあったとしても不思議ではないように思う。

- (18) 百間川水田で言えば、株あたり2個体が分けつせず主稈のみに50粒の粃を稔実させた状況に相当する。なお株あたり1個体が1本の分けつ穂を発生させて主糧と合わせて100粒の粃を稔実させた場合にも同じ収量を得るが、その場合には種子量が1/100になり、ここで想定する茎抜き作業量がさらに半分で済むことになる。
- (19) 種子量推定値をいくら精密化しても、大きな意味をもたせることは無論できない。ただ、律令期の田租率とされる3% (1/33) はこれを百間川弥生後期水田の種子率としてみた場合、結構穏当な値なのかもしれない。(400株×33粒×300坪=3,960,000粒/反。玄米千粒の重量を22gと仮定すると収量は約88kg/反。)。筆者の記憶では1970年代の当地の水田では200歩(坪)あたり3基の稲積を作った。当該田の反収を450kgとすると筆者の記憶にある稲積1基の玄米重は100kgだった計算になる。玄米100kgは上記の播種計画では3～4町分の種子量にあたることになり、「周溝状遺構」≒稲積≒種子倉庫と考える想定が有り得ないものではないことをある程度裏付ける。
- (20) スク言う小論も慣行農法の桎梏を免れている訳ではないが、筆者が試行錯誤中の容器栽培からは、例えば施肥を行わないだけでも「健全稲による安定的低収」がかなり実現できるように思う。
- (21) 直木孝次郎「倉下の語義」(『奈良朝時代史の諸問題』1968年所収)などによれば、律令期の高倉下には顕稲を保管するという。文献史学では倉下利用は出挙の起源に絡めて論ぜられるようだ。
- (22) 「小屋」と想定される北陸の「周溝遺構」に関しても、台部を壁体で囲う構造であることを以って「周溝状遺構」から除外する必要は必ずしも無い。北陸の「周溝遺構」に壁痕跡があったとしても「小屋」とは即断できないと考える。拙案を敷衍すれば、近似規模の正方形プランの掘立柱「建物」(本稿第1図SB13など)についても同様な問題を孕むことになる。「周溝遺構」については居住建物の季節的選択に絡めて「小屋」と想定することがあるかもしれない。この場合夏季中心であろう。一方拙案によれば「周溝」を「壁溝」と捉える必要は無いが、「壁溝」と考える場合には冬季の平地式倉庫の年毎更新の囲いを考えることになる。両者を統合した案も暦の上では可能だが、「周溝状遺構」に想定される祭祀的性格からすると一寸考え難い。
- (23) 「弥生神殿論争」について井上章一氏が考古学研究者に対して挑発的な筆調で振返っている(『伊勢神宮』2009年)。返す言葉もないが、筆者は「稲の産屋」についての考古学の側の理解が、井上氏が批判する「弥生神殿」や「弥生時代の宗教」の实在性に改めて脚光を浴びせることがあるような気がする。
- (24) 全くの私見であるが、「出入口」の脇に稲藁の堆積があったとされる群馬県黒井峯遺跡B116号平地式建物については、「稲の産屋」そのものであるように思える。埋没した季節(原田恒弘・能登健「火山災害の季節」(『群馬県立歴史博物館紀要』第5号1984年))が稲積の時節ではないため断言し難いが、「小屋」と推定されている土壇の南脇にある畠について「苗代」との理解が可能か、とか、「土間」中央に2基の「柱穴」がある、といった点なども含め、私は想像力を掻き立てられる。「鉄鎌による根刈り」を考えても良い段階なのかもしれないが、「一世帯の把握された遺跡ではその世帯には必ず」存在している「円形平地式建物」(大塚昌彦「円形平地式建物について」『土曜考古』第20号1996年)と呼ばれる近似遺構を含めても、管見の関連遺跡の記述には何れも「稲の産屋」の字句を引くところがない。なお藤田洋三『藁塚放浪記』(2005年 石風社)には「棒掛け」を含む各地の様々な稲積が紹介されており貴重。
- (25) 鉄鎌が相当普及していたであろう律令期においても「稲の産屋」に充てる遺構を指摘する声を聞かない。筆者は不案内であり手元の資料集を瞥見しただけだが、東国の居宅遺跡には数例の候補たる遺構を見出せるように思う。それらは義江彰夫氏が古代の地方神社を舞台に叙述した世界(『神仏習合』岩波新書33頁前後)を彷彿とさせる。

- なお、小林行雄は柳田から方法論を、折口信夫から「直感力の必要性」をそれぞれ学んだという（「折口学と私の考古学」（『日本文学の歴史 月報1』1967年）。「稲の産屋」の着想は柳田よりも折口の方がずっと先行して抱いていたものであったことも、当然小林は承知していたであろう。日本考古学有数の民俗学の理解者でもあった小林は「稲の産屋」をリアルタイムでどのように受止めたのだろうか、もし御存知の方がおいでたら是非とも教示願いたい。
- (26) 2012年5月開催の一般対象の公開講座の冒頭、参加者30名（ほぼ全員石川県民、平均年齢64歳）を対象に、近年の田圃につくられたニオ画像を提示してアンケートしてみた。A 実際に見たことがあるか、B 呼称を知っているか、C 作業したことがあるか、について、順次はい／いいで回答を求めたところ、「はい」の人数は、A17人 B7人 C3人であった。10年後、20年後に同様の調査を行ったら、どうなるだろうか。

参考文献

- 1 浜崎悟司 2009「石川県の村と家」『石川県埋蔵文化財情報』第21号（財石川県埋蔵文化財センター）
- 2 野々市市教育委員会 2013『二日市イシバチ遺跡3』
- 3 岡本淳一郎 1998「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『富山考古学研究』創刊号（財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）
- 4 財石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会 2006『金沢市梅田B遺跡Ⅲ』
- 5 財石川県埋蔵文化財保存協会 1995『小松市平面梯川遺跡Ⅰ』
- 6 野々市町教育委員会 1996『高橋セボネ遺跡』
- 7 羽咋市教育委員会 1994『吉崎・次場遺跡第13次』
- 8 松任市教育委員会 1993『横江古屋敷遺跡Ⅰ』
- 9 上市町教育委員会 1981『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町遺構編』
同 上 1984『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町木製品・総括編』
- 10 財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』
- 11 高岡市教育委員会 2007『石塚遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第17冊
- 12 片岡宏二 1989～1996「『周溝状遺構』の検討」『福岡考古』14～17 福岡考古懇話会、
同 上 1996「農耕社会の形成と発展」『小郡市史』第1巻 小郡市
- 13 福岡市教育委員会 2003『雀居9（別冊）』
- 14 都城市教育委員会 2008『横市地区遺跡群 平田遺跡 A 地点・B 地点・C 地点』
- 15 佐賀県教育委員会 1992『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第113集
- 16 甘木市教育委員会 2001『平塚川添遺跡』Ⅰ 同 2004『平塚川添遺跡』Ⅱ
- 17 片岡宏二 2005「原の辻遺跡発見の周溝状遺構とその意義」『原の辻遺跡調査事務所報告第31集』長崎県教育委員会
- 18 岡本淳一郎 2007「北陸の弥生後期集落」『2005年度共同研究成果報告書』財大阪府文化財センター
- 19 福田聖 2009「関東地方における「周溝」の研究をめぐって」『古代』第122号 早稲田大学考古学会
- 20 山本一郎 1991「山口県弥生時代袋状土坑の諸問題」（『古文化談叢』24 九州古文化研究会）
- 21 三浦純夫 1998「大型土坑の機能について」『竹生野遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 22 南根 祐 1990「稲積慣行の成立と存在意義」『比較民俗研究』2 比較民俗研究会
- 23 菊地有希子 2010「稲作の民俗考古学」『比較考古学の新天地』同成社
- 24 岡山県教育委員会 1984『百間川原尾島遺跡2』
- 25 安藤広道 1993「弥生時代の水田から米はどれだけとれたか」『新視点日本の歴史 第1巻原始編』新人物往来社
- 26 横山貴弘 2001「布掘式掘立柱建物について」『御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群』野々市町教育委員会
- 27 柳田国男 1953「稲の産屋」『新嘗の研究』第1巻 にひなめ研究会（後に『海上の道』1961年に所収）
- 28 大津透ほか 2013『新日本史』山川出版社